

組織目標評価報告書（令和4年度）

部局名：

大学院医歯薬学総合研究科 医学系

部局長名：

伊達 勲
医歯薬学総合研究科研究科長

目標・取組	目標・取組の達成状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)	
<p>①教育領域</p> <p>学修者主体の大学院教育を行い国際社会・地域社会でリーダー的存在となる人材を育てる。専攻医・専門医への大学院教育、すなわちリカレント教育を推し進める。大学院改組による学位プログラムへの移行のため、医歯薬学総合研究科改組WGでの検討を継続する。</p> <p>① 教育プログラム改革：博士課程4専攻を大括り化した1専攻にし、人材養成目的が異なる3つの学位プログラムを編成し、さらに学生各自の適性に合ったキャリアパスを形成できるよう選択プログラムを設定する。</p> <p>② AI関係の人材育成：東北大・北大との共同講座「Clinical AI」でのAI人材育成を行う。特に医療への応用を目指しリカレント教育に力を注ぐ。</p> <p>③ グローバル化を目指した大学院講義：大学院講義ではAIを応用してスライドに英語subtitleが自動翻訳されるようにし、外国からの大学院講義聴講を可能とする。</p>	<p>関連する 年度計画の番号</p> <p>5-1-1 6-1-1 10-3-1 15-1-1</p>	<p>教育領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等</p> <p>① 教育プログラム改革：学修者主体の大学院教育を行うため、現在の博士課程4専攻を医歯薬学専攻の1専攻とし、令和5年4月から医歯薬学専攻には9つの学位プログラム等を開設する。専門性・キャリアに応じた複数の学位プログラム等の設定により学修者の多様性に応じることが可能となった。初年度である令和5年4月には定員を超える入学者を得ることができた。</p> <p>② AI関係の人材育成：「Global X Localな医療課題解決を目指した最先端AI研究開発」人材育成教育拠点（東北大、北大との共同）として大学院博士課程に設けた医療AIコースは順調に発展し、博士課程1期生は7名、2期生は16名が学んでいる。加えて1年間のインテンシブコースは非常に人気が高く、1期生は54名、2期生は210名が登録されている。令和5年2月2日にはClinical AI アニュアルシンポジウムを岡山大学が主催して開催し、多くの参加者を得て情報交換を行った。</p> <p>③ グローバル化を目指した大学院講義：大学院講義でAIを応用してスライドに英語subtitleをつけることができるようになり、外国からの大学院講義聴講が可能となった。</p>
<p>②研究領域</p> <p>岡山大学はSDGs推進研究大学である。加えて岡山大学病院は、臨床研究中核病院・革新的医療技術創出拠点病院（橋渡し研究支援機関として）・がんゲノム医療中核拠点病院であり、病院と連携しながら研究を進めていく。</p> <p>① SDGs事例集の充実を図る</p> <p>② 橋渡し研究プログラムを推進し、学内外からシーズを募り、優れたシーズを発掘する。</p> <p>③ 科研費の獲得数の増加のため、予備添削を組織的に行う。応募資格者のリストを作成し、資格者には必ず科研費を応募してもらうよう働きかける。</p> <p>④ 学内外の共同研究を促進するため、ブレインストーミングなどのシンポジウムを開催する。</p> <p>⑤ Top10論文、Q1ジャーナル論文、国際共著論文の重要性について構成員に周知する。</p>	<p>関連する 年度計画の番号</p> <p>1-2-2 8-1-1 8-2-3 8-2-6 10-2-1</p>	<p>研究領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等</p> <p>①SDGs事例については医歯薬学総合研究科から59件の応募があり、ホームページ上で公表している。</p> <p>②橋渡し研究プログラムを推進し、学内外からシーズを募り、優れたシーズを発掘してきた。成果として、学内外から応募のあったシーズA 73件、preF 18件、シーズB 4件、シーズF 1件、シーズC(3) 1件、シーズC(4) 2件の計99件を審査し、シーズA 25件、preF 9件、シーズB 4件、シーズF 1件、シーズC(3) 1件、シーズC(4) 1件の計41件を岡山大学拠点シーズとしてAMEDに応募、ヒアリング等の支援を実施した。</p> <p>③科研費の獲得数の増加のため、医療系等研究開発戦略委員会で、予備添削を組織的に行い、添削を受けた数とその中から科研費獲得に至った例、応募資格があるにもかかわらず前年度応募をしていなかった者に働きかけ、科研費獲得に至った例を相当数得た。岡山大学から関連病院に異動になった客員研究員に積極的に科研費に応募してもらい相当数の獲得を得た。</p> <p>④ブレインストーミングは2022年8月最後の土曜日に行い、3年ぶりの対面での開催で多数の出席者を得て盛会となった。異分野の情報共有ならびに共同研究の促進の役割を果たせた。</p> <p>⑤教授選考の際、Top10論文、Q1ジャーナル論文、国際共著論文のデータがURAIによってチェックされるようになり、構成員に質の高い論文業績が重要であることが周知されるようになった。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>社会貢献領域としては以下の目標を設定する。</p> <p>① コロナ禍の下で集めた寄付金について、学生のPCR検査など必要に応じて困窮した学生を支援するために使用する。</p> <p>② 地域医療への貢献の面から、研究科所属の寄付講座を新規に設定、あるいは必要に応じて更新を検討する。</p> <p>③ 治験の推進などについて、CMA-Okayamaの活動に研究科として協力する。</p> <p>④ コロナ関連の鹿田キャンパスでの取り組みを広報し、ワクチン接種については医師、歯科医師、看護師、事務職などが引き続き協力する。</p> <p>⑤ 岡山健康講座を市民公開講座として開講し、市民、県民の健康増進に協力する。</p>	<p>関連する 年度計画の番号</p> <p>1-1-3 10-2-1</p>	<p>社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等</p> <p>① 本年の一時期、多くの学生が新型コロナに感染し、PCR検査を受ける必要が生じたが、その際、コロナ禍で集めた寄付金の一部を学生支援のために使用した。</p> <p>② 研究科所属の寄付講座、共同研究講座の新設や更新を積極的に進め、その数は寄付講座22講座、共同研究講座3講座となっている。このうち、令和4年度に新たに追加された寄付講座は3講座、共同研究講座は3講座である。</p> <p>③ CMA-Okayamaの治験ネットワーク：研究科として協力し、2022年度は20件の治験の依頼を受け15件を受託している。</p> <p>④ コロナ関連では鹿田キャンパス内では基本的に岡山大学病院での規制に従っている。直近の具体的事例としては年度末である2023年3月13日からのマスクの着用について、一般社会では政府の方針により個人の判断が優先されるが、鹿田キャンパス内は岡山大学病院内と同様、原則としてマスクを着用することを続ける。</p> <p>⑤ 医歯薬学総合研究科として保健学研究科と合同で、岡山健康講座を市民・県民向けに2022年9月にオンラインで行い健康増進に貢献した。医学系、歯学系、薬学系、保健学系からあわせて5名の教授に60分ずつの講演を行っていただき、1か月にわたってオンラインで多くの市民が視聴した。</p>
<p>④管理運営領域</p> <p>教育・研究・社会貢献領域の目標達成に取り組む。</p> <p>① 種々のコンプライアンス関連の講習会・研修会への教職員の出席を促す。</p> <p>② 研究科のホームページの改訂を行ったが引き続きタスクフォースのメンバーで内容のupdateおよび英語版の充実を図る。</p> <p>③ 部局運営体制の強化・活性化のため、拡大部局長室会議、研究科運営会議、研究科教授会などを定期的に行う。</p> <p>④ 薬学系の教職員の多くは津島キャンパスに居室があるため、会議はできるだけオンラインで行い、移動の時間を減らすことで効率化を図る。</p> <p>⑤ 若手教員の積極的採用や、研究助教の設定などを行い、若手が研究・教育の場で活躍しやすい環境を作る。</p>	<p>関連する 年度計画の番号</p> <p>9-2-1 11-2-3 15-1-1 その他-1</p>	<p>管理運営領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等</p> <p>① 種々のコンプライアンス関連の講習会・研修会を主としてオンラインで行い、受講の証明としてアンケートやミニテストの回答を求めた。また、未受講者のリストを確認できるようにし、未受講者には繰り返し受講を促す連絡をすることで出席率を向上させた。</p> <p>② 研究科のホームページをリニューアルしたことによりビジターが明らかに増加した。また内容のupdateや英語版の充実のため、タスクフォースのメンバーを決め対応した。</p> <p>③ 医療系拡大部局長室会議と研究科運営会議を1か月に1回、研究科教授会を年間4回開催し、各学系間の連携を深めることができた。</p> <p>④ ほとんどの会議はオンラインで行われ、ペーパーレスを基本としておりDX化が進んでいる。鹿田キャンパスと津島キャンパスの往復時間が節約でき、オンラインであれば学外からも参加可能なため、会議への出席率が向上した。</p> <p>⑤ 研究助教の設定を研究科にも病院にも設け、若手が経済的に困窮することなく研究できる環境作りを進めた。</p>

注1) 本様式全体が1ページに収まるよう作成してください。

注2) 自己評価による達成度(5~1)は非公表項目とし、組織目標評価結果を公表する際に消去します。